ふるさとの昔話

天間に伝わる 親孝行な重介

よい子の皆さんは、家でお手伝いをしますか。昔、天間の重介という子供は、目の見えないお母さんと二人暮らしで、とてもよく働きました。今回は、重介少年のお話です。

重介のお墓

母親思いの重介

昔、天間に重介という男の子がいました。三歳のとき、お父さんが病気で亡くなり、お母さんと二人で暮らしていました。

重介が六歳のころ、お母さんが突然重い病気にかかり、目が見えなくなってしまいました。重介はまだ小さいのに、お母さんの面倒をみたり、かわりの仕事もしなければなりません。近所の人は気の毒に思い、ときどき食べ物を届けてくれました。重介は、ほかの家の手伝いをして、お米やみそをもらい生活していました。

熱にもめげず働く

九歳のときです。重介は高い熱を出して働けなくなり、食べ物が何もなくなってしまいました。

そのとき、目の見えないお母さんが、近所の人に助けてもらおうと外へ出かけようとしました。それを見た重介は、お母さんを家へ連れ戻し、ふらふらしながらよその家へ行って手伝いを始めました。

この様子を見た近くの人たちはいろいろなことで重介親子を助けてあげました。

昼は賃仕事をし、夜は母をいたわる重介のことが殿様に知れ、「お母さん思いの子だ」といって、ほうびをくださったそうです。

親孝行はいいね

重介のお墓は、天間南にひっそりと建っています。すぐ隣に住む杉山辨作さん（七十三歳）は「江戸時代の年号が書いてある古いお墓で、戦後になっていわれを聞きました。お墓をまつる人もないのでうちでまつっています。親孝行はいつの時代でもいいことですね。」と語ってくれました。

杉山さん

地名の由来

木綿島（もめんじま）（今泉地区）

今泉一丁目の和田川寄りは、以前木綿島と呼びました。

昔、ここの豪農渡部氏が「大昔は富士川がここまで来ていたというから、甲州の土とここの土は同じだ。ここで綿のつくれぬはずはない。」と言って、甲州から綿の種子を取り寄せ、大勢の農民につくらせました。

綿の木はよく育って、たくさんの綿がとれたので、ここを木綿島と呼びました。

新市二十周年記念 十一月の主な行事

☆特別公演「いま富士に生きる」九日　富士文化センター　☆社会人サッカー　読売対本田　九日　富士川緑地公園　☆第三回ふるさと芸能祭　十六日　吉原市民会館　☆第十八回富士市婦人祭　二十二・二十三日　吉原市民会館　☆市民大音楽会　ベートーベン第九　二十九日　富士文化センター

新たな創造
確かな発展
―はたちの富士市―

富士のあゆみ 18

昭和放水路と石水門

田子の浦港にある石水門の碑

明治16年春、300年近い歳月を逆潮と戦い続けてきた吉原湊（みなと）付近の農民は幾たびもの防潮堤流出にめげず、湊口に石水門の築造を始めました。工事はオランダ式の水門工法を採用し、セメントを使用するなど最新の技術をもって、明治18年11月に完成しました。

石水門は、人々に親しまれ「六つ眼鏡」と愛称されましたが、昭和41年12月田子の浦港建設のため取り壊されました。

また、昭和18年には昭和放水路がつくられました。これは、かつて増田平四郎がスイホシ（堀割）をつくったのと同じ場所で、浮島沼の汚水を吐かせ、田畑2,000ヘクタールを水害から守るためにつくられました。

（文は、郷土史家鈴木富男氏の著書を参考にしています。）

こちら編集室

「広報ふじ」に使う写真はすべて白黒で撮り、編集室で現像・焼きつけをしています。市民の皆さんがみれば何げなく見ている写真も、ときに大変な苦労や失敗があります。

恥ずかしながら、今回も、七ページの渡辺さんと石川さんには二回も面倒をおかけしました。感謝、感謝。

発行・富士市役所　富士市永田町1丁目100番地　☎51－0123　人口 218,048人　男 108,217人　女 109,831人
編集・総務部広報広聴課　世帯数 62,131世帯　（10月1日現在）